

11. 京都市阿弥陀寺山門調査

—建築史実習（考古・地理・建築史合同実習）—

岸 泰子

1. はじめに

京都府立大学文学部歴史学科文化遺産学コースでは、毎年、考古学・地理学・建築史学実習（3回生配当）において、考古・地理・建築史3ゼミ合同実習（以下、合同メニュー）を開催している。

建築史実習からは、合同メニューとして歴史的建造物の調査の基本である実測実習（平面図作成）を提供している。今年度のこの合同メニューは京都市上京区にある阿弥陀寺山門を対象とし、3つの実習の受講生全員が阿弥陀寺山門の平面図（野帳）作成をおこなった。またあわせて、教員（岸）が所見を作成し、写真を撮影した。

本章では、その調査成果をまとめる。なお、阿弥陀寺の概要（立地、歴史など）については、本書Ⅰ-12を参照されたい。

2. 阿弥陀寺山門

山門 高麗門 本瓦葺

18世紀後期

親柱ごひら角柱 虹梁形飛貫 木鼻 控柱角柱 親柱控柱間 腰貫 飛貫 筋違 親柱組物なし 中備なし 一軒繁垂木

阿弥陀寺山門は、境内の正面、寺町通沿いに西面して立つやや規模の大きな高麗門である。高麗門の両脇には土塀が接続して立つ。南側に付く土壁には脇戸がある。

山門の親柱はごひら柱で、その柱を虹梁形飛貫で繋ぎ、その両端を木鼻とする。この虹梁形飛貫中央に束を立て、親柱とともに棟木を支える。親柱と控柱は腰貫と飛貫で繋ぎ、さらに筋違を入れる。

本屋根および小屋根の出桁は、持送りで受ける。軒はいずれも一軒繁垂木である。

寺伝では、天明の大火（天明8年〈1788〉）で伽藍建物が焼失し、その後の再建という。虹梁形飛貫の絵様をみると線が太く彫りも深いが渦・若葉の形状は端正であることから、18世紀後期のものとみて矛盾はないと考えられる。

寺町にある寺院については、これまで建造物調査はほとんどおこなわれていない。伽藍のなかにどのような歴史的建造物があるのか、ほとんど知ることができない。今後は、この阿弥陀寺山門のように調査をおこなっていくことで、洛中の近世寺院建築の特徴をより正確に把握していく必要がある。

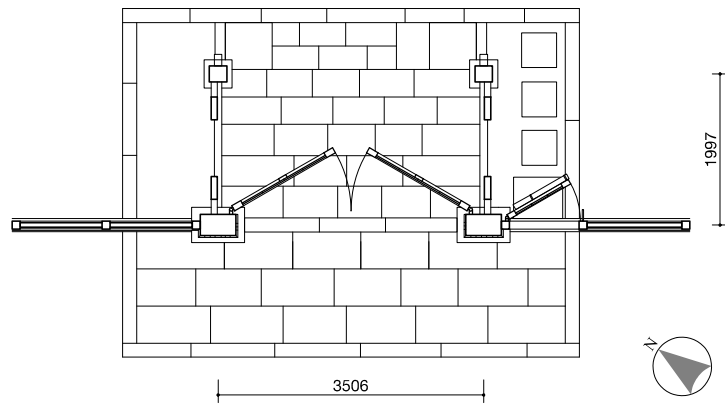


図1 阿弥陀寺山門平面図（1：100）



図2 阿弥陀寺山門正面



図3 阿弥陀寺山門背面



図4 阿弥陀寺山門背面全景



図5 阿弥陀寺山門虹梁形飛貫絵様

編集後記

余裕をもって仕事に取り組みたい。一つ仕事が終わる度に今度こそはと思うが、今回も果たせなかった。文字通りバタバタ。年末から長い師走が続いている。一つの救いは、春からのフィールドワークに始まり、冬の集報に終わるこの一連の営みが、10号を越え、府大歴史学科の伝統として根付きつつあること。フィールドをご提供いただいた関係各所のご厚意に深く感謝申し上げたい。

なお本書の組版作業は、歴史学科文化遺産学コースの合同実習メニューとして学部生が Adobe 社の InDesign を利用しておこなっているが、もちろんそのままでは本にはならない。一書にまとめるにあたって力を尽くしてくれた大学院生の頑張りにも深く感謝したい。(い)

京都府立大学文学部歴史学科

フィールド調査集報 第 11 号

編集・発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒 606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2025 年 3 月 31 日

印刷 株式会社 北斗プリント社

〒 606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2
